霧の中の異邦人

黒岩重吾

霧の中の異邦人

文藝春秋

霧の中の異邦人

昭和五十五年四月十日　第一刷

定価　九八〇円

著者　黒岩重吾

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二三

印刷　凸版印刷

製本　中島製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Jugo Kuroiwa 1980　Printed in Japan

霧の中の異邦人／目次

運河の病葉……5
水の墓場……46
幻からの声……86
白い手紙……128
終着駅の幻……172
暗い霧……202

裴幀　小貢政之助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

霧の中の異邦人

運河の病葉

午前三時頃まで暴走族の若者達がモンマルトル界隈を走り廻っていた。轟音の間にパトカーのサイレンが悲鳴のように聞えて来る。

轟音の中のサイレンの音は、私の気のせいか若者達に犯されている女の叫び声のように聞える。

今夜は土曜日だった。いや正確にいうと、もう日曜日になっている。

日本の暴走族と同じようにパリの若者達も黒い皮ジャンパーを着、土曜日の夜から日曜日の朝にかけて暴れ廻るのだった。

ことにモンマルトル界隈は坂道が多いので、彼等が好む場所の一つである。

スペインとジプシーのハーフのマリンキは、あれほど酒を飲んでいたにも拘らず、約三時間、私の身体を求め続けた。

身体が宇宙を浮遊し溶けてしまいそうな悦楽感も、回を重ねる毎に、苦渋を伴って来る。

多分私の顔は、般若の面になっていたに違いなかった。

だからマリンキがベッドから降りた時、私は欲も得もなく眠り込んでしまった。
私は自分の大きな鼾で眼を覚した。
ブラインドの間から朝の光が差し込んでいた。私はサイドテーブルの目覚時計を見た。
まだ午前六時だった。全身が気だるく私は俯せになってもう一度眠った。
今度は車の警笛の音で眼を覚した。
車といっても、豚の啼き声のような音は、観光バスの警笛である。
ドアに鍵が掛っていないのを思い出し、私は裸のままドアの傍に行った。
ところが意外なことに鍵が掛っていた。私はマリンキが部屋の鍵を持って出た、と思った。穢いことをする男だ、マリンキを視る眼がなかった、と私は後悔した。
念のために私はハンドバッグを開けてみた。驚いたことに部屋の鍵はその中にあった。私は顔を洗い、古道具屋で買った肘掛椅子に腰を下ろした。
床にはマリンキが持って来たウィスキーの瓶が空になって横たわり、汚れたコップが二つ並んで転がっていた。まだウィスキーの匂いが部屋に籠っているようである。
私は肘掛椅子に坐ったままサイドテーブルに手を伸ばし煙草を取った。一本も残っていない。仕方なく灰皿に山盛りになっている吸殻の一つを選び、真直ぐに伸ばして口に咥えた。
ハンドバッグに鍵がある以上、マリンキは、合鍵を持っていることになる。そうでなければ外からドアを閉められない。
だがマリンキが私の部屋に来たのは昨夜が初めてだった。

日本を出る時、私は母にパリに行ってフランス語を勉強する、といった。母は泣いて止めたが、私は一言も喋らず真面目な顔で坐っていた。ただ泣いている母の顔が変に小さく見えた記憶がある。その間、私は何も考えていなかった。

今もその時と同じだった。鍵のことを考えようとしたが、脳の一部が捥ぎ取られたようで私の思考力は空だった。私は煙草を、フィルターが焦げるまで喫い、また灰皿の中から喫い掛けの煙草を取った。

比較的長いのは私が喫ったものである。

フィルターに口紅がついているから良く分る。自分の口紅だが、その時何故か私は、フィルターの紅色が穢く思えた。

私は煙草を喫い終ると、私の部屋の中で一番良く磨かれた窓を開けた。五月の爽やかな微風が流れ込んで来て、ウィスキーの匂いを洗い落してくれた。

眩いほど白く輝いて見えるサクレ・クュール寺院の附近の木立の緑が眼に染みるようである。マロニエの樹には白い紙片を撒き散らしたような花が咲いていた。

パリに来て半年、母からの送金だけでは生活出来ず、私が持って来た金もとうとう底を突き掛けている。何か職を見付けて働かねばならなかった。大学の先輩で日本人相手の土産物店に勤めている京子は、自分の店に紹介する、といってくれていた。

ビジネスライセンスを持っていない京子の月給は千五百フランだった。その代り京子はフランス人のパトロンを持ち毎月二千フラン貰っていた。二千フランといえば、今のレートで日本円に

して十二万足らずだった。私はホステスをした経験がないので良く知らないが、銀座に勤めたなら、最低のパトロンでも、月二十万は出す、という。そういうところが、パリと日本との違いかもしれなかった。

私の名は遠藤阿里子、昨年の三月東京の大学の仏文科を出たばかりで、二十三歳だった。実家は静岡で茶問屋を経営している。

父は養子で大人しい男だったが、私が高校二年の時、キャバレーの女と関係した。

女の亭主だというやくざが家に乗り込んで来て大騒動になった。気丈な母が金銭で解決したが、父はそれ以後ノイローゼになり、トラックに轢かれて亡くなった。トラックの運転手は、突然飛び込んで来たので自殺に違いない、といい張ったが、運転手の主張は通らず、母は運送会社を相手取り、多額の賠償金を得た。

私がぐれずに高校を卒業し、東京の大学に入ったのは、母を泣かせたくなかったのと故郷に居るのが嫌になったからである。大学に入ると同時に私はバージンを捨ててしまった。相手は相馬明という演劇部の先輩だった。愛してはいなかったが田舎出の私には眩しいような存在だった。

私は文学部の仏文科に入っていた。

その頃から私は卒業したならパリに行こう、と漠然と思うようになっていた。

大学在学中、二度ヨーロッパに旅行し、二度目にカルチェ・ラタンのディスコで深夜まで踊り、イギリスから来ていたロックのグループのボーカルとホテルで泊った。

コニャックを飲み踊ったので、血が燃えていたせいもあるが、金髪のボーカルに付き纏ってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た白人女の鼻をあかしてやりたい、という変な意地も作用していた。
そのボーカルに惹かれたわけでもないが、ホテルの窓から煉瓦造りの建物と、小さなテラスに置かれている鉢植のチューリップや、名も知らない花々を眺めているうち、パリに来る決心が固まったのだった。
その時の心理を、私は男性のように分析は出来ない。母は私のことを強情で、男に生れたら良かった、と絶えず口にしていたが、私は感情に忠実な女性である。
父が死んだ時も涙を見せなかった母だが、私が一人でパリに行く、というと、私の脳と胸が空白になったほど涙を流した。
父が亡くなった後、店の方は東京の会社を辞めて戻って来た兄が継いだが、余り旨く行かず、母と兄の間は険悪になっていた。兄は父ほど商売人ではなかったし、母と兄嫁が絶えずいがみ合っていたのも、兄の仕事に影響したのかもしれない。兄嫁は、何故会社を辞めて実家に帰ったのか、と人の好い兄を責めていたようだった。
母は時々東京の下宿に私を訪ねて来て、兄嫁の悪口をいった。
人は私のことを、何の苦労も知らずに育った我儘なお嬢さんだ、と思っているかもしれない。大学まで出して貰ったのだからそうかもしれないが、私は私なりに日本の風土や、家族関係から立ち昇る瘴気のようなものに、悩まされて来たのである。
私の部屋にはトイレはあるが、バスはない。私も京子のようにバス付のアパルトマンに住みたいが腹の出たパトロンを持つ気にはなれなかった。

私はサンダルをはき、モンマルトルの公衆浴場に行った。パリの公衆浴場は日本の銭湯と異なり個室になっている。五フランで三十分間シャワーを浴びることが出来る。
誰に気兼する必要もないので、私は淫らな恰好で身体の隅々まで洗い、マリンキの匂いを消した。
私にマリンキを紹介したのは京子だった。
鍵のことも気になるし、京子に会い、マリンキについて訊かなければならない、と私は思った。
マリンキは、京子が勤めている土産物店に品物を運ぶ製造工場で働いていた。
日本でいうライトバンを運転し、週に一度ぐらいの割合で、ハンドバッグ、婦人用のアクセサリー、ネッカチーフ、ライター、バンドなどを持って来るのだった。
ジプシーの血が混じっているだけに色が浅黒く彫の深い顔で瞳の色も黒い。金縁のサングラスが実に良く似合う。本人の話では二十八歳で独身だった。今流行の刑事ものの映画にでも出演すれば人気俳優になれるだろう、と私はマリンキに会う度に思う。
二カ月前に京子に紹介され、三度デートしたが、陽気で何も隠さずに喋るマリンキに好意を持ち、昨夜私のアパルトマンに招待したのである。
マリンキの話によると、彼の母はジプシーだった。マドリッドでフラメンコを踊っていたが、店のマネージャーと一緒になり、マリンキを生んだのである。だがマリンキが生れる前に父親はナイフで刺されて死んだ。
刺したのはマリンキの母に惚れていたジプシーの男だが、警察に逮捕されたにも拘らず、監獄

に護送中脱走し、未だに行方が分らない、ということだった。

私はマリンキに、今、その男と会ったらどうするか、と訊いてみた。

「どんな男か、顔も分らないし、それにもう五十をとっくに過ぎている、奴が俺の前に現われ、お前の親父を殺した、といえば……そうだなあ、奴の顔にストレートをくらわしてやる、奴は舗道に仰向けに倒れるだろうな、その時、頭を打って死んだらそれで良いし、運良く死ななかったら、それでも良いさ、兎に角、俺は親父を知らないんだからな、それにおふくろは、俺を生むと直ぐ、新しい男と一緒になりやがった、その男が、俺を本当の子供のように可愛がってくれたんだ、だから俺はバリで、ハイスクールに入れたんだよ、おふくろは亡くなったがね、俺を育ててくれた親父はまだ元気だぜ、俺はその親父を実の父親だと思っているよ」

そういうとマリンキは口笛を吹いた。

私はこれまで、マリンキの口笛が、余り好きではなかった。だが重苦しい出生を明るい口調で告白した彼の口笛を聴き、私は初めてマリンキが絶えず口笛を吹いている気持が理解出来たような気がした。

マリンキの過去は、私などとは較べられないほど悽愴苛烈なものであった。だからマリンキは少年時代から口笛を吹き、淋しさを紛らわしていたのかもしれない。だがそんなことをいえばマリンキは笑い飛ばしそうだった。

何故なら、少年の頃のマリンキの周辺には、同じような環境の仲間が無数に居たような気がしたからである。そういえば何かの本で読んだ記憶があった。

……スラム街で育った少年達は、社会への反抗と、憤り、悪への情熱で、淋しさなど感じる余裕はないと……

私は公衆浴場を出るとアバルトマンに戻り、バスタオルを置き、化粧をした。

比較的肌の色は黒い方なので、油性の薄い口紅を唇の真中辺りにだけ塗る。私は余りバランスが取れていない自分の顔が好きではない。パリの外人の中には、チャーミングだとか、個性的だとか、褒めてくれる男性も居るが、少し突き出た頬骨や、一直線のきつい眉には、私自身が良く知っている勝気さや、エゴが出ているような気がしてならない。

京子が勤めている土産物店は、ヴァンドーム広場の近くにあった。オペラ座とマドレーヌ寺院の中間辺りである。日本人相手の土産物店の経営者にはユダヤ人が多いが、京子の店の経営者はイタリア人だった。ユダヤ人ほど悪辣な商売はしていないが、結構日本人客を騙している。例えば有名なメーカーの、オーストリッチや鰐皮(わにがわ)のハンドバッグなど、最新流行のものを売っているのだが、仕上で手を抜いている。男性客には分らないだろうが、高級品を見慣れた女性なら、何処で手を抜いているか、見抜けるだろう。一口で説明するのは難しいが、簡単にいうと、そのハンドバッグを少し使用すると端の方が剝げて来るのである。

ハンドバッグの端は衣服で擦れるから、オーストリッチにしろ鰐皮にしろ端の方は、丁寧にくるまなければならない。ところが京子の店で売っているハンドバッグは、皮を二枚合せて、その部分に色を塗り誤魔化している。だから少し使用すると合せた部分が剝げて来るのである。

京子の店では、そういうハンドバッグを三千フランぐらいで売っている。日本で同じ形のハン

ドバッグを買えば、四、五十万はするから、金の有る日本人客は、奥さんや恋人を喜ばせようと思い、無理をしても買う、ということになる。

ユダヤ系の店では流行遅れの物を売っているらしいが、日本人客を鴨にしている、という点では同じことだ。十年以上前なら兎も角、外国品が日本で氾濫している現在、四、五十万のハンドバッグを半分以下の値段で買える筈はないのである。

常識で考えたら分る筈だが、初めてパリに来て昂奮している日本人旅行者達は、売り娘のたくみな言葉に乗せられ、大儲けをしたような気になり、買ってしまうらしい。

実際良く出来た製品なので、私も手に取って眺めたが、京子に教えられるまで、手抜きの場所が分らなかったほどである。

私は公衆電話で京子の部屋に電話した。

八時にコメディ・フランセーズの近くにあるラーメン店で待ち合せることにした。

日本人のM氏のチェーン店だが、このラーメン店は安くて旨いのでなかなか繁盛している。M氏は大阪出身で、パリに来て成功した青年実業家だが、ラーメン店以外、日本料亭、土産物店、バーなど数店を経営していた。これは伝説的な話だが、M氏は最初ガイドをしていたが、貯めた金で小さなラーメン店を持ち、ガイドの客達を自分のラーメン店に連れて行き、おおいに稼いだ、ということだった。

そんな話を聞くと、私はM氏のバイタリティーに圧倒され、エネルギーの固りのような日本男性を想像していたが、京子の紹介でM氏に会ってみると如才のない腰の低い男だった。

ラーメン店には、ジーンズの若者達が集まっていた。旅行者も居るが大抵は目的もなくパリにやって来て、ビジネスライセンスを持たずに働いている連中だった。

中を覗いたが京子が居ないので、私は店の傍の鈴懸の樹にもたれて煙草を喫った。

カメラを持った中年の日本人の観光客が、そんな私を見て立ち止まった。どうやら彼は私を日本人の娼婦と錯覚したようであった。彼の眼は好奇心に光っていた。

かつて日本に居た当時、私は週刊誌で、パリに留学した日本の女子大生が、男に騙され転落し、娼婦になっている、という記事を読んだことがあった。

ただその記事が本当かどうかは別として、私が娼婦らしい日本女性を見たのは一度だけだった。彼女はパリの有名なホテルのバーに一人で坐り本を読む恰好をしていた。

旅行者がカメラを持ったので、私は樹の向う側に廻った。全く失礼な日本人である。

その時、赤いミニスカートに黒いソックスをはいた京子が、私を見付けたのに澄ました表情で歩いて来た。

京子はまだ二十七歳だが、表情に若々しさがない。目鼻立ちが整っているせいだけではなかった。自分は旅行者ではなくパリの住人だという虚栄心と、それとはうらはらの倦怠感が、京子からかつての瑞々しさを喪わせていた。私が知っていた頃の京子は、作家志望の恋人と同棲していたが、一日一日を充実して生きている女の悦びが溢れていた。

私達はラーメン店に入った。女性従業員と冗談をいい合っていた若者達は、私達を見ると黙り込んだ。なかには場違いな女性が来た、と敵意を見せる若者も居た。ここの焼飯が好きなので、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com